

# ニホンジカの生態・行動に関する研究

群馬県立利根実業高等学校 生物資源部

## 1. 研究の動機と目的

演習林では、平成22年に65km離れた尾瀬国立公園よりニホンジカ（以降シカ）が移動してきた。長距離を移動し、定住しない傾向にある。



また、この地域では、シカによる食害や踏み荒らしなどの圃場被害が発生している。しかし、生息・行動調査が不十分で、科学的データが少ない。そこで、演習林の標高 750m 地点でシカの行動サイクル調査を平成 26 年 10 月より実施した。

## 2. 研究方法と研究経過

演習林内の2カ所に調査区（間伐区・ぬた場区）を設置し、カメラトラップ法（トレイルカメラによる定点調査）による調査と分析を行う。

※間伐区:平成23年度に間伐作業が本格的に行われた調査区

※ぬた場区:非間伐地区で、シカのぬた場がある調査区

### (1) 研究内容

#### i. 間伐区とぬた場区との生息数比較調査

間伐地区におけるシカ生息数の変動調査と、非間伐地区との生息数比較

#### ii. ぬた場区でのシカの行動サイクル調査

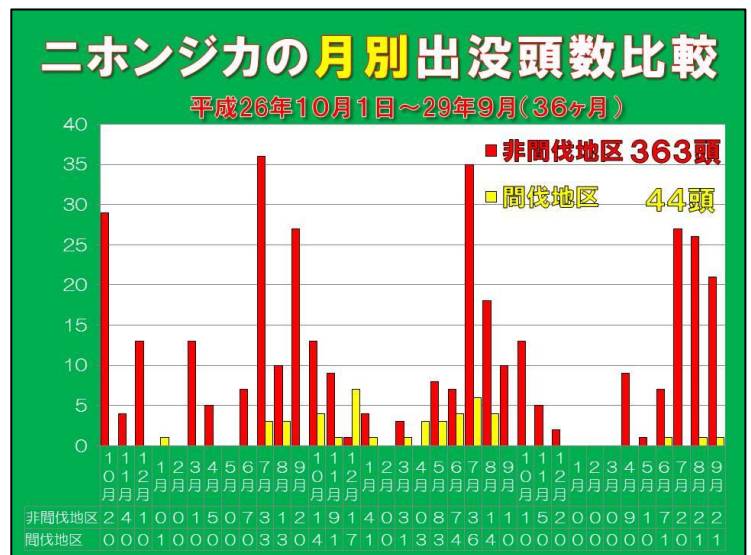
カメラトラップ法によるぬた場での年間でのシカの行動（出没数）サイクル調査

## 3. 研究結果と考察

### (1) ニホンジカの生息数比較

間伐前と比較して、シカの撮影回数が75%減少した。

間伐作業が行われていない東側（ぬた場区）と比較をしてみると、平成26年以降では、間伐区は36ヶ月間の出没頭数が44頭であるのに対し、ぬた場区は約8倍の363頭であった。間伐によりニホンジカの生息数が減少することが確認できた。



### (2) ニホンジカの行動サイクル調査

演習林の東部、標高 750m 地点のぬた場区で平成 26 年 10 月より 3 年間、シカの行動サイクルを調査した。

#### ① 繁殖期の成獣オス

9 月下旬～10 月にかけて、繁殖期を向かえる。成獣オスは繁殖期のみに出没し、ぬた場でぬた打ちを行い、その後、マーキングを周辺で行う。

調査結果として、ぬた打ちは明け方と夕方に多く見られ、1 頭が 5 回程度行うことが

分かった。

## ②夏季から9月にかけてのシカの行動

6月以降夏季にかけてメス集団・幼獣の行動が多く見られた。7月はシカの出産期のため親子が多くなり、子育て場として利用されている。また、繁殖期前の9月になると、成獣メスの集団での行動が多く見られた。

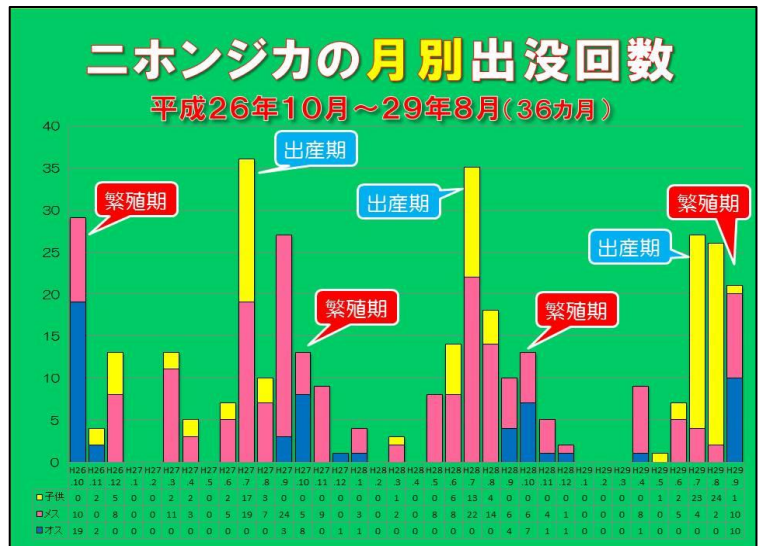
## ③冬季から春季にかけてのシカの行動

繁殖期が終わると、出没頭数が減少した。12月以降の行動は少なく、降雪のある2月は行動が見られなかった。

## ④研究結果と考察

標高 750m の森林地帯では、1. 夏季から繁殖期にシカが多く移動して来る、2. 冬季に降雪のある演習林では越冬していない。

シカは、季節ごとの餌条件や生活環境により、行動サイクルが明確化されていると考察できた。また、ぬた場は、水源の乏しい地域では、貴重な水源地であることも分かった。



## 4. 今後の研究課題

赤城山北西麓の演習林では、シカは越冬していない。また、成獣オスは繁殖期以外に出没しない。つまり、演習林以外でシカは、何処でどのような生活をしているのかについて把握できていない。

今後の課題として、赤城山全体の行動サイクルを把握することが必要である。そのため、研究データを、関係機関に情報提供すること。そして、関係機関と情報共有することが必要である。現在、その活動として博物館や関係学会での研究発表、群馬県など行政関係機関が主催する研修会や協議会の場で、情報発信と情報交換を行っている。

群馬県環境森林部によれば、赤城山のシカは尾瀬等を移動する利根日光個体群の一部であり、地域個体群内で長距離移動や広域分散をしていることが推測できるという。また、春から秋に掛けては餌条件の良い場所で過ごし、冬季は積雪の影響のみならず、狩猟の影響で可猟区から鳥獣保護区に移動して越冬していることも判明している。

今後も、人間と野生動物との共存ができるように、研究に取り組んでいきたい。